

時逃れ

最強好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

梶井基次郎の檸檬を読んで憧れた作者の世迷言短編集

目次

対象	7
夢を嗅ぐ	5
夕暮れ	3
時逃れ	1

時逃れ

時を歩む人間は、時に愚かで、時に愉快である。

だが私はどうだろうか。愚かであるだけではないか、そう思う日があるのだ。

夕焼けに心が揺らぐ、夜のネオン街に心が踊る。

鈍色の雲が満たすこの心は、ふやけてしまった風呂上がりの手のひらのようだ。紫煙が月に蠢く、そんな風景が浮かぶ私の脳髄には、ポルトが入っているに違いない。

目に見える全てのものが輝いている、なんて。

綺麗事でも屁理屈でもない。

が、私は、好物を食べる時の心象のように、その言葉を愛でるのである。

私達は時を、人生を、空間を生きている。母の乳房から全てが始まり、終わりが見えないこの生はなにか途方もないものを思い浮かべてしまう。

なんなんだこれは、x x x x x

私の言葉に乗せる思いはちっぽけで見せられない。察してくれ、察してくれと願うばかりだ。

悲しみの果てを経験し、喜びを感じ、独りを寂しく思い、自らへの怒りが全てを纏めあげる。

こんな文章はただの一人語りである。理解されることを私は望まない。感じて欲しいのだ。

朝があり、夜がある一日という概念。

はっ、ははは

なんと私は馬鹿なのか。時に支配されている。これほど愉快なこととは無い。

愉快？私は愚かであったはずだ。もしや、愉快であることが出来たのだろうか。

いや違う。愉快は愚かだ。天才と馬鹿のようなもの。

私は馬鹿である、愚かである。この文章を書こうと思ったのもふとした時だった。大学の窓から見えた青空が私を憂鬱にする。

タップするスマートフォンの文字、刻まれる言葉。何度も何度も直すことのできる、これは……なんだ？

言葉なのか？言葉は放った瞬間心に刻むものではなかったか。直せないものであるはずなのに、いつから私達はこんなにも簡単に言葉を使っているのか。

考える度に思う。人間の愚かさには虹が似合う。

自殺する若者たちの血飛沫が奏でる四重奏と虹。

虹は架け橋とはいったもので、天国地獄へひとつ飛びだ。来世でまた会いましょうではなく、今世に命をかけた。

今は午後4時。帳が降り始める猿の刻。

耳に響く工事現場の音。子供たちの遊ぶ声。「ママハンバーグ食べたーい！」という幸せそうな親子の話し声。私は何をしている？毎日見る通学路の風景、自転車に乗るルーチンワーク、今日の夜何をしようかと考えること。普通だ。普通こそ素晴らしい。特別なことなんて、たまにでいい。バイトで稼いだお金で家族と食事なんかね。そんな日常。

これが幸せなのだろうか。スーパ一の坂道をJamiroquiが彩る毎日が。降り出す梅雨の雨。濡れる手。軋む体も今では幸せだ。

この心臓が止まるその時まで、私は、どう生きればいいのか。

夕暮れ

私は夕暮れの中を歩いた。

車のタイヤに弾き飛ばされる小石、どこからか飛ばされてきたであろう隣のスーパーのレシート。

その全てが私を彩るピースだった。

学生の笑い声、香るコンビニのホットスナック、甘酸っぱいカップルの赤く染まる空気。

死に物狂いで生きている私は、それを羨ましく思う。

戦火で埋め尽くされた焦土の上に私は立っている。幾人もの思いを刻んだこの地では、夕焼けが美しいのだ。

コインランドリーに行き交う主婦の会話は、常に生き続ける人間の原動力の元となる。

ヴァイオリンの音に視線が行き交う裏通り。

建物の隙間から見える空の陰り。

蹲る子供の、なんと悲しき姿か。電車が行き交う路線図を薄目に、流れゆくサラリーマン、風俗嬢、ピエロ。

私は、いや私のようなちっぽけなゴミが暮らすここ島国では、心と心の通いがあるのだろうか。

他人を憎み、誹謗中傷し、横目に流す。あげつらう言の葉を並べた、寂しきマリオネットは、誰だ。誰だ。誰だ。誰だ。誰だ。誰だ。誰だ。誰だ。誰だ。誰だ。誰だ。誰だ。

すべて消えてしまえ、全て消えてしまえ、総て消えてしまえ。s U b e t e e k e t E S I m a e 。

心の陰りは、空の陰りとは違って消えてくれない。いつも横にあり、気を抜けば襲ってくる。上辺だけを並べて、心を偽る者のなんと愚かなことか。

藍染のシャツにしみ込んだ夕暮れの雨が、静かに冷やすアスファルト。

仮初めの仲に走る信濃川。あなたがそばにいてくれたから。

あなたは？

わたしは？

ここには気狂いしかいない。日々を諦め、自分が自分であることを認めようとせず、思考放棄異常論理記憶喪失自傷行為。

ソプラノの声に耳を傾けたのは、他の誰でもない。私だ。

歌を歌おう。世界に聞こえるように、歌を歌おう。

例え言葉が通じなくても、例え音程が外れようとも。

歌は規律を想起する。

歌こそ自由であるべきだ、なんて、戯言のような言葉だって、私は信じる。だってそれしかできないのだから。何故って？その理由を見つけるのが生きるってことだから。

ハープの音が聞こえてくるこの地では、嘆き悲しみ震える夜もある。

力の無さ、不甲斐ない、そう思う現代の大人は多い。

あなたには力がある、なんて簡単には言えないけれど、ないとも言えない。

決めつけたって意味がない。それは我々が人間だからである。

小さいことで感情は変わるし、揺れ動く。

しかし、明日を信じて私は、私たち人間は歩み続ける。

空に浮かぶあの夕日に、夜空に浮かぶあの星に。

思い、祈り、願い。

私は夕暮れの中を歩いた。

夢を嗅ぐ

夢を嗅ぐ

人間は夢を見る。しかしそれは目で見ているのではない。

感じているのだ。私たちは何かを感じて生きていくことの証明だ。ならばどこで感じているのだろうか。目か？耳か？口か？鼻か？それとも、脳か？

心。感性。これに尽きる。

幻想は幻想であり、真実は真実である。しかし、夢の中では現実と幻想が混ざり合う。

秋風が吹く空に浮かぶ積乱雲や、桜に降り注ぐ淡い雪。それらは現実には有り得ない。秋に夏の雲は生じず、春に雪は降らない。

いや、本当にそうか？

私たちはいつから常識に騙されているのだろう

私たちはいつから決めつけた

私たちは

どうしてここまで堕ちたのか

人間の感性と心には限りがあるものか？

私たちがいつも持つ感情は誰かに、何かに制限されているのか？

そうだ、制限されている。

自分で自分を制限しているのだ。

そんな自分を見限れ。思いのままに表現するのがありのままの人間のはずだ。手に筆を持ち、心の内を書く。人は一人じゃ生きられないと偉人は言ったが、それは確かだ。しかし、心は人一人で表現できる。

例えそれが否定されようと、間違っていたとしても何が悪いのだろうか？

好きを好きと言えないその眼ほど価値のないものは無い。

月は月だろう？ならば好きは好きなのだ。

形、真、理の三つが人間の構成要素ならば、私たちは広く雄大な大地に立っている神の名に従う言の葉を奏でる機械人形にはなり得ない。

そのままできていることの大切さやそのままを大切にすることの強さを私たちは得るために、現実と幻想を行き来する。

ならば私たちは夢を見ると言うが、夢に行くのではないか？夢を感じるのではないか？夢を抱えているのであるからして、見ることに値しないのではないか？そんな問いを常に脳髓に刻み込む。

しかし私は夢を見てもいないし抱えてもいない。

私は夢を嗅ぐのだ。

臭いではなく、匂いなのだ。そこに甘さや苦さ、辛さは無くとも匂いはある。

夢の匂いとは、現実味を帯びた幻想を意味する。そこにでき上がる夢は作品として存在する。ゴッホが描いたものに似ているのかもしれない。

夕暮れのエマオの道で歩くその姿にかかる霧の匂いは赤の香り。

はて、この感覚は私だけのものかもしれないね

あなたが見守る文章の羅列でさえ私には嗅ぎつけることの出来る意味のあるものなのだから。

夢を嗅ぐ。その匂いに釣られた錦鯉とは私の事だ。新しさを求めた結果、火を見るように明らかな私の語彙力と想像が、マリア像の美しさのように。

浮き彫りになる。

対象

祈りとは届くのか

誰に祈るのか

物か？人か？

神なのだろうか

祈るといふ人の行為は、精神の守護である。

縫り付く物が人間には必要だ。それは神であっても、人であっても対象は何でも良い。人それぞれの感性であるからして、私たちが祈るものを想像することは価値を持つ。

どれだけ綺麗な景色であろうと

どれだけ美しい絵画であろうと

私たちの心は何にも縛られない。

しかし私たちは自ら縛るのである。法や則の在り方に数多の思考を巡らすことは、縛ることの何物でもない。ルールやマナーを課すことで自分を律するのだ。

自由とはなんなのかを考える時、私たちは好きなことをすることが、好きなようにすることが自由だと考える。ただ思想の中で、律するものがあつて初めて自由は形成されると語る者もいる。

ある意味その様に考える事自体が私たちの自由なのではないか。そう思うのだ。

自由の女神のように、そこに降り立った独唱曲の狭間のダンスタイム

青空を見上げる逡巡の一息

深淵のような海に身を投げる遅いようで早いような時流し

横殴りの雨の中でタバコを吸うホームレスが歩んだ歴史

買い物帰りの主婦が微笑む風景をフォトフレームに入れて保ちたいと思う家族の心

年の瀬に恋人と過ごす秒針を刻む点と線
散らばり消える花火の儂さに涙を零す白鳥の痕跡
赤子を抱きしめるその手
その手で人を殺めた殉教者

自由とは平等か？否。

死と生の板挟みである私たちは平等ではない。

死に向かつて生きる惨めなこの心は、命を持つもの全てにあてはまる。

一歩に重きを置き、進まず立ち止まることを恐れ、境遇に泣き喚ぎ、望みを絶つ感傷。

進め、進め、我らの先は長い。

そう信じて前に進んだ愚か者は鉛玉に撃ち抜かれ消えていった。

戦い争うことが平和を生み出すというなら私たちのこの生活は地平線に向かつて伸びる陽光の対角線に引かれた惨殺死体と同様だ。

死の上に生があるのか

生の上には？

分からない

思考の渦につままれて、私たちは息を潜める。

天と地の境にこれほどの絶景があるというのに、精神と頭脳の間には生臭い血みどろの墓石がゴロゴロと転がっている。

美意識に支えられたこの心の内を、どう表現しようか。

神様

助けてください

殺してください

救ってください

生きることから

死ぬことから

そんな祈りは届かない

神はいない、いるはずがない

居ないことの証明はあるのか？なんて無粋なことを聞くな

神がいるなら私たちは生まれてこなかったはずだ

ゴミを生み出す必要性がない

神を信じる愚か者共よ、恥を知れ

全ては自分のせいだ

何者かの力が働いた？

理解不能な奇跡？

そんなことを言っているから

歌を歌い、祈るんだ

そんな暇があるなら

自分に、自分へ

『生きろ』